慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評：稲葉昭英・保田時男・田渕六郎・田中重人編『日本の家族1999-2009：全国家族調査[NFRJ]による計量社会学』東京大学出版会、2016年
Sub Title	
Author	渡辺, 秀樹(Watanabe, Hideki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2017
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.22 (2017. 7) ,p.138- 141
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20170701-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：稲葉昭英・保田時男・田渕六郎・田中重人編

『日本の家族 1999-2009――全国家族調査[NFRJ]による計量社会学』

東京大学出版会、2016 年

渡辺　秀樹

本書は、全国家族調査[NFRJ]の成果の報告である。題名にある「1999-2009」というのは、第 1 回の調査（NFRJ98）が 1999 年に実施、第 2 回（NFRJ03）が 2004 年、そして第 3 回（NFRJ08）が 2009 年に実施されたことによる。この 3 回にわたって得られたデータの分析が本書の内容である（データの名称の年が実査の年よりそれぞれ 1 年早いのは、それらがサンプリングの実施された年を指しているからである。サンプリング年が、データセットの名称に付与されているわけである。）

編著者総勢 28 名。この大冊を中心となって編まれた稲葉昭英氏ほか編者の尽力に敬意を表したい。その苦労はたいへんなものだったに違いない。

家族社会学の方法は多様である。この書の副題は「全国家族調査[NFRJ]による計量社会学」であり、内容はまさにその通りであるが、本書は家族社会学の計量的方法に関心を持つ研究者だけではなく、質的な方法などさまざまな方法に関心を持つ家族社会学者にとっても、家族を議論する上で避けては通れないものであろう（たとえば、野田潤（2016）は、『社会学講義』という新書のなかで家族社会学を講義する章として書かれたものであり、計量的方法に依拠するものではないが、理論的・歴史的・質的方法による文献などとともに本書を適確に踏まえて議論を展開し纏めている。最近の好例であろう。野田潤, 2016, 「家族社会学」, 橋爪大三郎／大澤真幸 ほか『社会学講義』ちくま書房, 170-211.）。

『三田社会学』の読者は、家族社会学を専門としているとは限らない。そうではない領域の研究者が大半であろう。どのような領域を専門としようとも、あるいは経済学・法学・政治学ほかの学問分野で家族に関心を持ち、その現状に関して実証的な知見を踏まえておこうとするなら、この本はまずおさえておくべき書となる。

計量的研究に限らず、さらには研究者に限らずどこかで現代家族を語ろうとする人、現代家族の実態を踏まえて議論をしようとする人は、まず本書を参照することを是非ともお勧めしたい。ただし、すべての章を読むことは一般読者には相当な負担となるかもしれない。そのときは、少なくとも第 1 章「2000 年前後の家族動態」は読んでほしい。私はこの章を、昨年（2016 年）院ゼミ（慶應義塾大学大学院社会学研究科）で読み、また繰り返し 1 人でも読んだ。圧巻の章である。計量的分析の知識はほとんど必要としないから、ふだん敬遠している人も読んで

渡辺秀樹「書評：稲葉昭英・保田時男・田渕六郎・田中重人編『日本の家族 1999-2009――全国家族調査[NFRJ]による計量社会学』」
『三田社会学』第 22 号（2017 年 7 月）138-141 頁

ほしい。編者つまり稲葉氏（ら）によって書かれた本章は精読するに値する。巻頭として、本書の構成を簡単に紹介するだけでなく、現代家族の変化と安定の実態をどのように見ることができるか、ひとつの理解のしかたを簡潔に記述し説明している。

全体は、5 部構成となっている。Ⅰ部 家族の基本構造；1 章–4 章。Ⅱ部 家族構成と家族行動；5 章–7 章。Ⅲ部 育児期の家族；8 章–11 章（このうち、8 章は、松田茂樹「父親の育児参加の変容」、9 章は、西村純子・松井真一「育児期の女性の就業とサポート関係」）。Ⅳ部 成人期・脱親期の家族；12 章–15 章。Ⅴ部 性別役割分業と家族；16 章–18 章（17 章は、内田哲郎・裵智恵「ワーク・ファミリー・コンフリクト」）。19 章は「補章 マルチレベル分析による家族研究」であり、全 19 章に及ぶ。それらを最初の「はじめに」、そして最後の「付録 NFRJ 調査の概要」が挟む。どちらも重要な文章である。

個々の章を紹介する余裕はない。どの章も興味深いが、1 章を読んだあとは、読者の関心にしたがって読み進めればよいと思う。関心の領域というより、全体として家族社会学の計量分析の典型（＝現在）を知りたければ、編者たちが関わっている章、つまり 7 章、13 章、14 章あたりをまず読むというのもひとつの入り方であろう。読者は＜家族の計量社会学＞の範例を知ることができる。理詰めの展開に爽快感を味わえるかもしれない。

ここでは 1 章を詳しく検討することにしたい。節立ては以下の通り。「1 家族の多様化と再生産、2 雇用の不安定化と家族、3 夫婦関係の不安定性、4 女性の就業と家族の変化、5 高齢者と子どもの関係、6 安定的なパターン、7 本書の構成、8 今後に向けて」である。「1990 年代後半から 2010 年ごろにかけての家族的事象の実情や変化について概観し」（p.3）ている。ここでは、家族的事象を整理する枠組が設定される。枠組は 2 つの軸によっている。ひとつは選好の変化であり、それが「ある」か「ない」か吟味する。もうひとつは、変動の方向であり、「安定・再生産」か「変動・多様化」かが吟味される。この 2 つの軸によって、4 つの家族的事象が場合分けされ表に示されている（表 1.1、p.5）。

すなわち、ある家族的事象についての考え方（＝選好）が変化し、実態としても変化が認められるとき＜整合的変動＞、考え方は変わらず事象の変化も認められなければ＜整合的安定＞、考え方の変化は認められるが、事象の変化は見られない＜非整合的安定＞、考え方の変化は認められないが事象の変化は認められる＜非整合的変動＞という 4 つである。もちろん、どの区分に入るかを明確にできるとは限らないが、事象を見るときに常に意識と実態を区別し、その上で意識と実態との関係性に注目することは重要であるだろう。

選好のみを見てあるいは実態のみを見て変化や安定を語るのでは不十分である。両者の関係を探ることのなかに変化の実相に近づくことができるということであろう。ここで想い起こすのは、森岡清美・望月嵩『新しい家族社会学』（初版 1983、培風館）における＜家族の分類と類型の結合関係＞という議論である（同書第 2 章、p.8-16）。類型は家族形成規範による区分であり、分類は現実に現れた形態（＝実態）による区分である。日本の家族社会学のいわば古典

につながる議論の土台が設定されているということである。詳細な説明は省かざるを得ないが、たとえば直系家族制（類型；ここでは選好）のもとで夫婦家族的形態（分類）を現出するのは、ライフコース的な非逸脱的ズレなのか(整合的関係)、やむを得ぬ／望まぬ逸脱的ズレなのか(非整合的関係）を念頭において、常に変動を吟味するということである。読者には，本章の表 1.1 と森岡・望月の図 2.8（同、p.16）とを突き合わせてみることも進めたい。

こうしてみると、それがどのような安定なのか、あるいはどのような変動なのか、その実相は単純ではなく、複合的である。そうした視点を踏まえて家族の主要な領域の安定と変動の実相を注意深く概観していくのが、2 節以降となるという展開となっている。だから単純な結論は期待出来ない。冷静に慎重に検討した上で、家族はこの 10 年間それほど変化をしているわけではない、ということであろう。しかし、それでも変化の萌しを探りながら、「垣間見える」という表現を繰り返し使って、変化への分析の対応を準備する必要性を説くのがこの章の最後の 8 節「今後に向けて」である。

この章にも関わるが本書全体に対する書評者のコメントを 3 つ記したい。

ひとつは、全国家族調査（NFRJ）プロジェクトの推進に関わる。19 章の補章で述べられているように、ダイアッド集積型調査という特徴を活かすことがまずは、本プロジェクトの発展を保障するものではなかろうか（p.359)。代表的な社会学の全国調査である SSM ではできない分析テーマが NFRJ ではできる（逆も同様）という個性を大切にしたい。この特徴を活かした章がいくつも含まれていることは重要であろう。そのことで SSM 調査とも連携できる。

ふたつは、家族の多様な形態が分析課題に位置づいていくことである。7 章「離婚と子ども」がその明示的な例となっている。離婚やひとり親世帯への注目の重要性は今後より一層増すであろうし、これからの計量的な研究の沃野と思われる。編者の稲葉氏と若い研究者たちがリードする魅力的な領域である。関連して、1 章 8 節で編者たちも正しく展望しているように、家族への複数の帰属や移動、そして非家族的生活経験を、いかに枠組に取り込んでいくかが今後の NFRJ にとって重要になると思われる（質的研究として注目される、野辺陽子・松木洋人ほか、2016、『＜ハイブリッドな親子＞の社会学』青弓社、などとのコラボレーションあるいは基本的知見の相互提供にもつながることが期待される)。

三つ目は、本書で取り組まれている分析は、家族そのものの分析であると同時に、労働（就業）や教育と家族との＜関係＞についての分析である。政策や公的機関、地域やコミュニティや友人（選択的関係）と家族との＜関係＞でもある。たとえば、個人の親密性に関するニーズ、そして育児や介護などケアに関するニーズが、その充足を家族に全面的に依存する場合は実際に少なくなっているのだろうか。家族が他の社会的諸部門とどのように分担し合っているのか、家族がニーズの担い手から退却していくのか、それが階層やジェンダーあるいはライフコースの違いによってどのように変化するのか、というような問いは重要であろう（たとえば、家族が支えられなくなって、それに代わるものが無いというのが現在の若者の貧困／格差にはある。

それが、将来の男性の危機ともなりうる。1 章)。ニーズによって、家族という境界を超える、あるいは境界が無くなる様相を多様に展開してゆくように予想される。ここでも、ダイアッド集積型というこの調査の特徴もおおいに強みを発揮すると考える。こうした問いを他の領域の研究者と共有するようになると、全国家族調査の遠心力と求心力が増すのではないだろうか。すなわち、全国家族調査が連携する他の研究領域は広がり、そうした研究領域の人びとを全国家族調査というプロジェクトに引き込むようになるのではないだろうか。

技術的なことを最後に付け加えれば、継続調査としての NFRJ プロジェクト自体の問題である。本書は、上述のように 3 つのデータセットを使用した分析が意図されており、したがって各章で、3 つのデータ間の質問票 ; たとえばワーディングや選択肢について比較検討している。そこで気づくのは質問票が変化していることがけっこう多いということである。それは必要があり、よく議論した上で、各質問票を決めたのだろうと思うが、こうして振り返って 3 回分を突き合わせるということが，今後、回を重ねるにしたがって必然となる。次回以降、今回の知見をよく踏まえて調査設計／質問票の作成に取り組むことが求められる。

本書は、全国家族調査という持続的なプロジェクトの土台であり、長く参照されるものである。

（わたなべ　ひでき　帝京大学文学部）